

## 北野社一切経の底本とその伝来についての考察

馬 場 久 幸

### はじめに

写本一切経は奈良時代から多く書写されてきたが、南北朝から室町時代に成立したものは少ない。『大般若波羅蜜多經』六〇〇卷や五部（華嚴經・大集經・般若經・法華經・大般涅槃經）大乘經など比較的大部の經典の書写は見られるものの、一切経の書写は稀である。写経には誤字・脱字が生じるのが常であり、また日数も要する。鎌倉時代以降、版本大藏經が中国や朝鮮半島から伝来するため、それが、一切経が書写されなくなった理由の一つかもしれない。さて、応永十九年（一四一二）に書写された北野社一切経の存在は有名であり、それをもって日本での一切経書写の歴史に幕を閉じたとも言われている。<sup>①</sup>

その北野社一切経については、一九五八年に臼井信義氏によって詳細な研究がすでになされている。<sup>②</sup>しかし、その後それに注目した研究は少ない。島田治氏は、一切経書写の願主であ

る増咩と増範に注目して検討しており、萩野憲司氏は、水主神社の『大般若波羅蜜多經』と北野社一切経との関連について検討している。<sup>④</sup>ただ、北野社一切経についての書誌学的な研究は現在まで十分とは言えず、その底本はほとんどが思溪版大藏經であり、ごく一部高麗版大藏經が混ざっているという指摘がある。<sup>⑤</sup>『大般若波羅蜜多經』は一行十四字詰であるという版式面と高麗版大藏經の刊記が転写されていることから、それを底本として書写されたと指摘しているが、<sup>⑥</sup>その底本の検討において、高麗版大藏經の特徴との関連性について詳細な検討は十分である。また、高麗版大藏經との関連があるとすれば、その伝来に関してもある程度の時期が絞り込めるであろうと考えられる。そこで、本稿では北野社一切経の底本について再検討するとともに、その伝来についても考察する。

## 一、北野社一切経の底本の検討

### 1. 北野社一切経の現状

北野経王堂願成寺は、足利義満が明德の乱（一三九二）の戦死者を弔うため、応永八年（一四〇一）に北野天満宮の境内に創建された寺である。この北野経王堂に納められた一切経は、明治時代初期の神仏分離によって破却され現在大報恩寺（千本釈迦堂）に伝わっている。

この一切経は、応永十九年（一四一二）に北野経王堂の覚蔵坊増範という僧が発願し、同年三月十七日から八月十八日までの五ヶ月という非常に短い期間に、東は越後・尾張、西は九州肥前・薩摩など諸国の僧俗二百余人の合力を得て勸進書写されたものである。

一切経の帖数は、補写を含めて五〇四八帖が伝えられており、昭和五六年六月九日に重要文化財に指定された。五〇四八帖とは、『開元釈教録』に入蔵されている経典の総数として定められた数字である。最初の刊本大蔵経である宋の勅版大蔵経をはじめとして、歴代の刊本大蔵経はこれを基準に刊行されている。北野社一切経は、偶然にもそれと同じ数字であるが、『大般若波羅蜜多経』だけを見ても、元来は六〇〇帖であるが現在は五六二帖しかなく、三八帖は欠本の状態である。つまり、北野社一切

経は五〇四八という数字に合わせて後世に補写されたものではなく、偶然そのような帖数になったと考えるのが妥当であろう。

『北野経王堂一切経目録』<sup>(7)</sup>によると、応永十九年（一四一二）に書写された経典は四八一六帖、明応九年（一五〇〇）と文亀元年（一五〇一）の室町時代後期に書写された経典が八二帖、江戸時代に入った慶長年間と元禄年間に書写された経典が一五〇帖あることから、何度か補写されたことがわかる。また、現在の北野社一切経は折本装であるが、元来は卷子本であった。目録の「時代」欄に「大破」「中破」などと記されているものが多いことから、目録が作られた当時から経典の状態は良好ではなかったと考えられる。

### 2. 北野社一切経の底本

(1) 『大般若波羅蜜多経』  
北野社一切経の底本については、各経典に付されている千字文番号から判断して、そのほとんどは宋の思溪版大蔵経であるが、『大般若波羅蜜多経』巻第五三二から五三四までは、高麗版大蔵経の刊記が書写されていることから、この部分だけは高麗版大蔵経であると指摘されている。<sup>(8)</sup> また、元禄年間に補写された際には、底本として黄檗版大蔵経が使われていることも奥書きから確認されており、『大乘比喻王経』・『大哀経』（千字文函

号「發一函」や『諸法本無經』（千字文「常」一五二函）の巻頭に開元寺版大藏經の刊記が転写されている。北野社一切經の底本となった大藏經は、混合藏の可能性が高く、それらの特定は困難であると言われている<sup>9)</sup>。室町時代後期や江戸時代に補写された時の底本については、黄檗版大藏經をはじめとする日本に所藏されていた經典であると考えられる。そこで、この一切經が書写された当時、つまり応永十九年（一四一二）に書写された經典に限り、その底本について再度検討する。

北野社一切經の『大般若波羅蜜多經』は五六二巻が現存している。その中の巻第十は室町時代後期の補写であり、巻第十六は元禄年間の補写である。これらの版式は、ともに一行十七字詰であることから検討の対象から外す。

#### ①『大般若波羅蜜多經』の底本の再検討

応永十九年に書写された『大般若波羅蜜多經』の版式は、一行十四字詰である。このような版式を持った經典は珍しく、それも同様の大藏經は、宋の勅版大藏經、金刻大藏經、高麗版大藏經などがある。

宋の勅版大藏經は、『開元釈教録』の入藏録に定められた一〇七六部五〇四八巻の数に合わせて刊行された。装丁は卷子本で、版式は一行十四字詰である。北宋の開宝五年（九七二）

から太平興国八年（九八三）までの十二年をかけて完成した最初の刊本大藏經である。

この大藏經の系譜を受け継ぐものとして、金刻大藏經がある。これは皇帝の勅版や権力者による出版ではなく、民間で造られた大藏經である。各經典の刊記によれば、皇統九年（一一四九）から大定十三年（一一七三）頃までの二五年をかけ、山西南部の解州天寧寺で造られた。版式は一行十四字詰一張二十三行の卷子本で、最初の余白に經論名「第 卷」「第 張」「字号」の柱題がある点は、宋の勅版大藏經と同様である。

高麗版大藏經は、宋の勅版大藏經の影響を受けて、顕宗朝に造られた大藏經と高宗朝に造られた大藏經の二種類がある。一般的に、前者を初雕大藏經といい、後者を再雕大藏經という。これらは、他国の侵入を仏力によって退散させるために造られた大藏經であるが、後者の再雕大藏經は、宋の勅版大藏經や契丹版大藏經、初雕大藏經などを校訂して造られた。両者ともに、ほぼ一行十四字詰一張二十三行の版式であるが、華嚴部に関しては、高麗版大藏經（再雕大藏經）が造られた当時、高麗国内で流通していたものを採用したため、一行十七字詰である。

高麗版大藏經は、応永年間に朝鮮から多数齎されている。これに関しては後述するが、一行十四字詰の版式を持つ三種類の大藏經の中で、北野社一切經が書写された年代からすると、高

麗版大蔵経を底本にしている可能性が最も高いと考えられる。宋の勅版大蔵経は、齋然（？～一〇一六）によって宋から齎された事例はあるが、それ以後の流布は不明である。金刻大蔵経についても、日本に伝来したかどうかは不明である。

②北野社一切経『大般若波羅蜜多経』に見える刊記と高麗版大蔵経の特徴

北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』巻第五三一・五三二・五三三・五三四の四帖には、それぞれの最後に「己亥歳 高麗国大蔵都監奉／勅雕造」という刊記が書写されている。<sup>10</sup>高麗版大蔵経にも、各帖の最後に「〇〇歳 高麗国大蔵都監奉／勅雕造」、「〇〇高麗国分司大蔵都監／勅雕造」など五種類の刊記が印刷されている。<sup>11</sup>この刊記の干支である「己亥歳」は一二三九年を指し、この年に『大般若波羅蜜多経』巻第五三一などの版木が雕造されたことを意味する。「高麗国大蔵都監奉／勅雕造」とは、高麗時代に大蔵都監という機関が設置され、そこで大蔵経の雕造事業が行われていたことを意味するのであるが、それが国家を挙げての大事業として行われていた。

そこで、前記の『大般若波羅蜜多経』の四帖に書写されている刊記と高麗版大蔵経の『大般若波羅蜜多経』の該当箇所を比較してみた。干支は両者ともに「己亥」であり、「高麗国大蔵都

監奉／勅雕造」の部分も同じであった。

③北野社一切経『大般若波羅蜜多経』に見える柱題と高麗版大蔵経の特徴

『大般若波羅蜜多経』巻第五一には、「大般若第五十一 第 張 宙」という柱題が書写されている。<sup>12</sup>高麗版大蔵経は各張の前か後に必ず印刷されており、前にある場合は版首題、後にある場合は版尾題とも呼ばれている。これは版木一枚一枚に彫られており、どの經典の何巻何張かを確認するための役割も果たしている。「大般若」とは經典名、つまり「大般若波羅蜜多経」を、五一とは巻第五一、「張」は張数を、「宙」は千字文函号をそれぞれ示す。柱題の下には、その版木の刻工者名が刻まれていることもあるが、『大般若波羅蜜多経』巻第五一には、刻工者名が刻まれた形跡はない。このように、柱題が版木一枚一枚に刻まれていることも高麗版大蔵経の特徴の一つである。

影印本で『大般若波羅蜜多経』巻第五一の版心を確認してみると、各張の後に印刷されており、その柱題は「経」字の有無により二種類あることがわかった。一つは④「大般若経第五十一 第 張 宙」、もう一つは⑤「大般若第五十一 第 張 宙」である。また、『大般若波羅蜜多経』巻第五一は二三張であり、第一張を除いてすべてに柱題が印刷されている。そこで、二張か

ら二三張までの柱題を見ると、次の通りである。

⑦の柱題があるのは、二、三、七、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二一、二二、二三張である。④の柱題があるのは、四、五、六、八、九、十、十一張である。

北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』巻第五一に書写されている柱題は後者④であるため、四、五、六、八、九、十、十一張のどれかに該当することがわかる。

以上、北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』の中で、応永十九年に書写されたものは、高麗版大蔵経の三つの特徴と一致することがわかり、北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』の底本は、高麗版大蔵経の『大般若波羅蜜多経』であることが確認できた。

北野社一切経は、『大般若波羅蜜多経』だけを見ても書写の統一がなされていないことがわかる。刊記や柱題があつたりなかつたりするのはなぜなか。これは、写経する過程での問題である。書写する際、二百人が携わつたと言われていることから、刊記や柱題までを含むかどうかの統一が困難であつたと考えられる。特に、柱題は経文の内容とは一切関係がないため、ほとんどの場合は書写されなかつたのであろう。しかし、偶然『大般若波羅蜜多経』巻第五一では書写されたことから、その底本が高麗版大蔵経であるということが確認できた。

(2) それ以外の経典

応永十九年に書写された『大般若波羅蜜多経』の底本は、高麗版大蔵経の特徴と一致することから、それを底本にしていることが確認できた。

では、それ以外の経典についてはどうか。応永十九年(一四二二)に書写された経典のほとんどは、一行十七字詰であるが、一部は以下のように一行十四字詰の経典もある。それを挙げると次の通りである。

〔衣〕『離垢施女経』

〔可〕『大方広円覚修多羅了義経』上・下巻(高麗版、思溪

版は一巻)(400)

〔曲〕『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』(1320)

『大虚空蔵菩薩念誦法』(1324)

〔仁王般若念誦法』(1322)(以上三巻一帖)

『仏説如幻三摩地無量印法門』(1450)(三巻二帖)

『仏説蟻喻経』(1451)

『金剛壽命陀羅尼念誦法』(1319)(以上二巻一帖)

『広釈菩提心論』(1449)(一帖)

『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』(1326)(一帖)

『一切秘密最上名義大教王義軌』(1452)(一帖)

『一字頂輪王念誦儀軌』 一卷 (1321)

『瑜伽蓮華部念誦法』 一卷 (1325) (以上二卷一帖)

『観自在多羅瑜伽念誦法』

『聖観自在菩薩心眞言瑜伽觀行儀軌』 (1327) (以上二卷一帖)

「衣」「可」「曲」は、千字文函号を表し、(400)・(1320)などは、高麗版大蔵経の通番(K番号)を示す。しかし、思溪版大蔵経が所蔵されている増上寺の『増上寺三大蔵経目録』で確認すると、臼井信義氏が指摘したように、これらの千字文函号は思溪版大蔵経と一致し、高麗版大蔵経とは一致しない。また、千字文函号「曲」に入っている經典も、高麗版大蔵経の順番とは明らかに異なっている。「曲」内での順番は前後するが、函内の經典は一致する。ただ、北野社一切経では、『大方広円覚修多羅了義経』が上・下巻に分かれているが、思溪版大蔵経では一巻本である点異なる。

しかし、『大般若波羅蜜多経』以外のほとんどの經典は一行十七字詰であり、それらの底本は恐らく思溪版大蔵経であろうと考えられるが、これら十五部の版式は高麗版大蔵経と同様に一行十四字詰である。版式から考えると、これら十五部の底本は、一行十七字詰の思溪版大蔵経ではなく、一行十四字詰の高

麗版大蔵経であり、何らかの事情で混ざったものと考えられるべきであろう。

## 二、北野社一切経の底本の伝来について

### 1. 北野社と足利氏の関係

さて、北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』の底本が高麗版大蔵経であること、またそれ以外の經典にも一行十四字詰の經典が混ざっていることから、それらも同様の可能性が高いことが確認できた。そこで、北野社一切経の底本となった大蔵経の伝来時期について検討したい。

周知のように、北野社一切経は応永十九年(一四一二)に北野経王堂の覚蔵坊増範という僧が発願し、同年三月から八月までの五ヶ月という期間で書写されている。その目的は、北野で毎年三月に將軍によって執行された北野社一切経会のためであったこと<sup>13)</sup>から、足利將軍家と関係があったことがわかる。北野社と足利將軍家は、北野社一切経が書写される以前から親交があったとされる。それは、北野万部経会の存在である。北野万部経会は、明德の乱で討ち死にした山名氏清をはじめ、多くの人馬の霊を弔うために、將軍足利義満が戦場であった内野で大施餓鬼会を行ったとされ、これが万部経会の草創となった。

以後、天文十四年（一五四五）まで行われた<sup>14</sup>。その開催を奉行し、道場である経王堂を管理していたのは、一切経書写の大願主でもある覚藏坊増範である。覚藏坊の経奉行としての職務は、①経王堂の管理、②経会に招請する経僧の確保、③経僧に与える經典の管理、④経会にかかる料足の管理、⑤勸進活動などであった<sup>15</sup>ことから、その中心人物であったと考えられる。北野社一切経を書写する際に、願主であった覚藏坊増範は底本となる大藏経を探していたと推測される。

## 2. 北野社一切経の底本となった大藏経の伝来時期

『朝鮮王朝実録』や『善隣国宝記』の記録によると、応永年間から天文年間までに、日本では足利將軍家をはじめとして諸大名が朝鮮（高麗版）大藏経を求めている。この間、日本に齎された（高麗版）大藏経は四五藏に及ぶ<sup>16</sup>。北野社一切経の底本に高麗版大藏経が混ざっていることから、恐らくこの頃に齎された大藏経を底本にしたと考えられる。では、それがいつ誰の手によって齎されたのか。前述したように、北野社一切経書写の願主である覚藏坊増範は、北野万部経会の中心人物であり、足利將軍家との関係が深かった。底本となった大藏経に關しても足利將軍家との関係が払拭できない。そこで、足利將軍家の要請によって齎された（高麗版）大藏経の伝来事例を見ると

する。足利將軍家の朝鮮への大藏経要請は、義満の時代から始まったのだが、それが最初に実現したのは義持の時代である。即ち、応永十八年（一四一一）であり、『太宗実録』太宗十一年十月条に

己亥 日本国王遣使来献土物求大藏经也。大内殿多多良徳雄遣使献輿兵器、亦以求大藏经也。<sup>17</sup>

とあり、日本国王、即ち当時の室町幕府の將軍であった足利義持と大内盛見（一三七七〜一四三二）が朝鮮に大藏経を求めている。この二ヵ月後に朝鮮側の返答として、『太宗実録』太宗十一年十二月条には

丁亥 日本国王使及大内殿使人告還。土御経筵序引見曰爾王示以究討劫掠梁需之賊。予甚喜謝。使人对曰、吾王求大藏经乃命賜一部。<sup>18</sup>

とあり、倭寇の討伐を喜び、その礼としてこの時日本国王使に大藏経を贈っている。『朝鮮王朝実録』などを見ると、足利義持の時代には六藏の大藏経が日本に齎されたことがわかる（表参照）。

さて、北野社一切経は、応永十九年（一四一二）三月から書写が始まるが、その底本として使われた『大般若波羅蜜多経』は、高麗版大蔵経であることは前述した通りである。書写の時期から考えると、応永十八年（一四一一）に入手した大蔵経の中の『大般若波羅蜜多経』を底本として書写したと考えられる。

ただ曰井氏は、北野社一切経の底本が刊本の転写である可能性も否定できないと指摘しているが、その可能性はない。なぜなら、足利氏の使者が朝鮮で大蔵経を賜ったのが、応永十八年（一四一一）十二月であり、その後帰国したとしても応永十九年の一月か二月に京都に到着するはずである。北野社一切経の書写が応永十九年（一四一二）三月から始まっていることを考えると、その間に転写することは時間的に不可能だからである。

この大蔵経が応永十八年十二月に賜ったものであるなら、『大般若波羅蜜多経』だけが高麗版大蔵経で、それ以外は思溪版大蔵経を含む中国版の大蔵経であるとも考えられ、日本で混ざったというよりは、朝鮮にあった時点ですでに混合蔵であった可能性が出てくる。

（表）

年代	将軍	大蔵経	出典資料
応永十八年（一四一一）	足利義持	一蔵	『太宗実録』十一年十月己酉条 『太宗実録』十一年十二月丁亥条
応永二十年（一四一四）	足利義持	一蔵	『太宗実録』十四年六月辛酉条 『太宗実録』十四年七月壬午条
応永二六～二七年 （一四一九～一四二〇）	足利義持	一蔵	『世宗実録』元年十二月丁亥条 『世宗実録』二年一月乙巳条
応永二九年（一四二二）	足利義持	二蔵	『世宗実録』四年十一月丙寅／己巳条 『世宗実録』四年十二月己亥／己巳条
応永三十～三十一年 （一四二三～一四二四）	足利義持	一蔵	『世宗実録』五年十二月壬申／甲戌条 『世宗実録』六年正月戊寅／己卯条

### 3. 日本所蔵の思溪版大蔵経

北野社一切経の底本について、『大般若波羅蜜多経』は高麗版大蔵経であり、それ以外は宋の思溪版大蔵経であると指摘されている（一部高麗版大蔵経が混入）。思溪版大蔵経とは、湖州の思溪（現在の浙江省呉興府）円覚禅院にて、この地方の豪族王永従一族が開版したもので、南宋紹興二年（一一三二）にその雕造が始まった。後代になりこの寺院は法宝資福禅寺と改められたが、刊記の中には資福禅寺版経と書かれたものもあり、後に追加されたと考えられる。<sup>20</sup> 思溪版大蔵経の版木は王氏の菩提寺である円覚禅院に置かれたので「円覚蔵」とも呼ぶ。

思溪版大蔵経目録には、『福州思溪円覚禅院新雕大蔵経律論等

目録』と『安吉州宝資禪寺大藏經目録』との二種類がある。前者は前思溪版即ち「円覚藏」の目録、後者は後思溪版即ち「資福藏」の目録である。目録が二つあることから、福州版と同様に思溪藏の大藏經にも二種類の藏經があったという説もあったが、現在では、後者は前者の追離・補刻の部分を加えたものであるという説が妥当視されている。<sup>(21)</sup>

思溪版大藏經は、増上寺、最勝王寺、喜多院、愛知県岩屋寺、岐阜長滝寺、大谷大学、唐招提寺、長谷寺などに所藏されている。各寺院の所藏状況と伝来経緯については、次の通りである。

#### (1) 増上寺

増上寺所藏の思溪版大藏經は、現在五三五六帖（思溪版五三三九帖、黄檗版十五帖、写本二帖）が確認されている。もとは滋賀県の菅山寺にあったが、慶長十八年（一六一三）に徳川家康（一五四二～一六一六）が召し上げて増上寺に寄進した。菅山寺には代償として五〇石の朱印地を家康から与えられた。この大藏經の日本伝来に関しては、建治元年（一二七五）に菅山寺中興開基專暁が中国から持ち帰ったものである。<sup>(22)</sup>

(2) 最勝王寺 五五三五帖（思溪版五一九五帖、和版二〇二帖、写本一三八帖）

#### (3) 喜多院

喜多院所藏の大藏經は、四六八七帖（思溪版二六九一帖、磧砂版三九帖、元の普寧寺版一七八九帖、宋写本三三帖、江戸写本一四四帖）が確認されている。江戸時代初期に毛利輝元（一五五三～一六二五）が徳川家康に献上し、さらに慶長十九年（一六一四）に天海（一五三六？～一六四三）のために喜多院に寄進したものである。この大藏經の特徴としては、『大般若波羅蜜多經』が一帖も入っていないことである。また、伝来を示す珍しい印記（思溪版に「渤海藏記」「清河」朱印、普寧寺版に「三韓」朱印）などがある。<sup>(23)</sup> 元の普寧寺版大藏經には、皇慶三年（一三一四）に高麗の匡靖大夫朴景亮が亡き母の冥福を祈るために注文印刷したという刊記がある。<sup>(24)</sup> つまり、喜多院所藏の大藏經の中でも元の普寧寺版大藏經は、朝鮮半島を経由して日本に伝来したことになる。毛利輝元が徳川家康に献上したことから、室町時代に大内氏によって日本に齎されたものと考えられる。この大藏經が朝鮮半島で混ざったのか、日本に伝来した後大内領国内で混ざったのかは不明である。

#### (4) 岩屋寺

岩屋寺の宋版大藏經は、五四六三帖（思溪版五一五七帖、和版一一一帖、写本一九五帖）が確認されている。大野城主佐治

盛光が宝徳三年（一四五二）九月に、岩屋寺へ寄進したものである。もとは、梅尾高山寺にあったものと考えられ、正和二年（一二三三）に日本に伝来した。<sup>(25)</sup>

(5) 唐招提寺

唐招提寺所蔵の大蔵経は、四七四九帖（思溪版四四五六帖、和版八八帖、写本二五〇帖）が確認されており、和版や写本が混ざっている。『楞伽阿跋多羅宝経』は一行十三字詰、一版二五行、毎行五行折りの版式であり、『大仏頂首楞嚴経』と『大方広仏華嚴経』（実又難陀訳八十華嚴）は、一版二五行、一行十五字詰、毎行五行折りであるため、思溪版大蔵経とは版式が異なる。これは宋代の杭州大中祥符寺天台経蔵院の沙門智海、可孜が衆縁を募り、この経を刊行したものである。これが大蔵経の中に収録されている。<sup>(26)</sup>しかし、この大蔵経の日本伝来については不明である。

(6) 興福寺

興福寺所蔵の大蔵経は、四三五四帖（一部磧砂版を含む）が確認されており、主に思溪版大蔵経であるが、二帖のみ磧砂版大蔵経が含まれている。また『大仏頂首楞嚴経』があり、唐招提寺同様に大蔵経に収録されている。<sup>(27)</sup>しかし、この大蔵経の日

本伝来については不明である。

(7) 長谷寺

長谷寺の大蔵経は、二七六六帖（思溪版二二二〇帖、磧砂版二帖、和版八七帖、写本四五七帖）が確認されている。もとは大阪府岸和田市の久米田寺に所蔵されていたが、明応六年（一四九四）に長谷寺に寄進された。この大蔵経は、久米田寺が弘安三年（一二八〇）に経蔵を建立されて安置されていることから、それ以前に伝来したようである。<sup>(28)</sup>

(8) 大谷大学

大谷大学図書館所蔵の高麗版大蔵経とともに、もとは安芸厳島神社にあったことから、大内氏との関係が考えられるが、それ以前の伝来経緯については不明である。<sup>(29)</sup>

以上、最勝王寺、長滝寺、唐招提寺、興福寺、大谷大学が所蔵する思溪版大蔵経について伝来経緯が不明であるが、増上寺や長谷寺のように鎌倉時代に伝来したものもあれば、喜多院のように朝鮮半島を経由した可能性のあるものもある。これらを見ると、思溪版大蔵経だけで一蔵をなしているのではなく、中国や日本の刊本、写本なども混ざっていることから、後世に補

完了したと考えられる。喜多院所蔵の大蔵経は、思溪版大蔵経の他にも磧砂版、元の普寧寺版大蔵経や宋代の写本も含まれている混合蔵である。

唐招提寺の大蔵経には、版式が異なる『大仏頂首楞嚴経』・『大方広仏華嚴経』（八十華嚴）などがある。北野社一切経の『大方広仏華嚴経』（八十華嚴）も版式が一行十五字詰であることから、唐招提寺や興福寺と同様の経典が混ざっていたと考えられる。

#### 4. 朝鮮経由の中国版大蔵経

喜多院所蔵の大蔵経の中には、高麗時代の官僚であった朴景亮が亡き母の冥福を祈るために注文印刷したものが含まれているが、こうした事例は他にもある。そこで、朝鮮を経由して日本に伝来した中国版大蔵経の事例について見ることとする。

##### (1) 相国寺所蔵の大蔵経

相国寺には高麗版大蔵経が所蔵されているが、『大般若波羅蜜多経』六〇〇巻だけは元の普寧寺版大蔵経である。この大蔵経は、『根本薩多部律撰』巻第一をはじめとする一部の巻末に「花谷妙栄大姉之寄進也」と書かれていることから、花谷妙栄大姉が寄進したことがわかる。花谷妙栄大姉とは、陶弘房（？）

一四六八）の妻である<sup>(31)</sup>。陶氏は大内家と関係が深いことから、この頃には大内領国内に大蔵経があったことは明らかである。しかし、この大蔵経の日本伝来については不明である。

##### (2) 対馬西福寺所蔵の『大般若波羅蜜多経』

対馬の西福寺には、普寧寺版大蔵経の『大般若波羅蜜多経』五九九帖が所蔵されている。この『大般若波羅蜜多経』は、泰定三年（一三二六）に高麗国門下省僉議賛成事であった趙璉が注文印刷したものである。それが、応永年間に宗貞茂（？）一四一八）によって対馬に齎された<sup>(32)</sup>。

##### (3) 対馬妙光寺所蔵の『大般若波羅蜜多経』

対馬郷土資料館には、普寧寺版大蔵経の『大般若波羅蜜多経』が所蔵されている。これも西福寺同様、泰定五年（一三二八）に全州の戸長朴環の妻李氏が、息子の僧正正柔とともに自身と亡き夫のため銀泥を喜捨し、經典の外題を銀字で書かせたことが、巻第一の巻末に記された願文<sup>(33)</sup>でわかる。その中に高麗版大蔵経が一帖混入しており、朝鮮時代に対馬に伝来したようである。

#### (4) 園城寺所蔵の大蔵経

園城寺の普寧寺版大蔵経は、高麗時代の貴族が元に発注印刷したものであるが、元来二つの大蔵経が混ざって一蔵となっている。

まず、延祐元年（一三二四）に星山郡の車氏が、亡き父の趙文と祖母の国大夫李氏の冥福、併せて国泰民安を祈るために家財を喜捨して大蔵経一蔵の印行を行ったものである<sup>(34)</sup>。

次に、高麗の通直郎典校寺丞李弘升とその妻咸安郡夫人尹氏が、至正年間（一三三五～一三六七）に亡き父の通直郎季祚と奉常大夫尹傾、亡き母の光山郡夫人金氏と洞州郡夫人金氏の冥福、さらには自身及び一族の福智増長を願うために財産を喜捨して大蔵経を印行し、郷邑古阜郡の万日寺に奉納したものである<sup>(35)</sup>。

この大蔵経の『大智度論』巻第二四と『同』巻第三九は、版式が一行十四字詰であることから高麗版大蔵経である。二種類の普寧寺版大蔵経が混ざって一つの大蔵経となり、そこに一部高麗版大蔵経も入っているが、どのような事情で混入したのかは不明である。

この大蔵経は大内盛見によって大内領国内の国清寺に安置されたが、園城寺が慶長年間に再建された際、毛利輝元によって慶長七年（一六〇二）に国清寺にあった経蔵・八角輪蔵と共に

寄進された。

以上、高麗の貴族が元に注文印刷した大蔵経や『大般若波羅蜜多経』は、朝鮮半島を経由して対馬や大内氏領国内の寺院に安置されていたが、それが後代に相国寺や園城寺に寄進されている。園城寺の大蔵経は、二つの大蔵経が混ざり一蔵となっている。これは、日本に伝来してから混ざったとは考え難く、大内盛見に下賜される前、即ち朝鮮ですでに一蔵となっており、そこに一部ではあるが高麗版大蔵経の経典も混入したと考えられる。

園城寺や喜多院は、複数の大蔵経が混ざって一蔵となっている。これは、同じ経典が重複していないことから、意図的に一蔵としたようである。混合蔵かどうかは不明であるが、朝鮮時代に幾つかの大蔵経を集めて一蔵にした事例がある。足利義政が朝鮮に等堅らを派遣し、越後安国寺のために大蔵経を求めたことがあった。『成宗実録』成宗十八（一四八七）年七月条に

丙子 日本国王使僧等堅等辞。其答書曰我邦誕隣貴国、世修交、王屢遣使、以達懇勸之誠、（中略）来論大蔵経、諸処求索、非一所存、無幾重違雅教轉成一件、就付回使<sup>(36)</sup>。

とあり、朝鮮各地の寺院から掻き集めようやく一蔵の大蔵経と  
したとある。また、京都の船舟三昧院という寺院が新しく整備  
されたので、そこに奉納する大蔵経を要請した。『成宗実録』成  
宗二十年（一四八九）九月条に

壬午 日本国王使僧惠仁辞。其答書曰、専使惠書、備諸雅  
履康裕、仍受嘉賜、感慰殊深。来示大蔵経、素有印本、前  
此丙午歳、僅得具蔵、以付回使。今且重違敬教、遍索伽藍  
所儲卷蔵倣数一件。聊表謝忱、土宜物件、具如別幅、幸領  
納。<sup>(39)</sup>

とあり、朝鮮では各地に散らばった大蔵経を探し出し、ようや  
く一蔵として揃え回使に与えていることがわかる。この頃には  
朝鮮からの大蔵経入手が困難になっている。<sup>(40)</sup> こうした事情は、  
この時に始まったことではないかもしれない。一蔵が揃って  
いた寺院もあれば、何らかの事情で大蔵経の一部が欠けた寺院も  
あった。宝徳三年（一四五二）に宗金という人物が大蔵経を要  
請した時の記録に、「発末 宗金請大蔵経、以善山府得益寺所蔵  
三千八百卷賜之<sup>(41)</sup>」とあり、完全な一蔵ではないものの得益寺<sup>(42)</sup>  
に所蔵されていた大蔵経三八〇〇巻を賜っている事例もある。  
ただ、元の普寧寺版大蔵経が朝鮮を経由して日本に伝来して

いる事例ばかりであり、思溪版大蔵経が伝来したという事例は  
見られない。しかし、高麗時代の前半には、宋の勅版大蔵経、  
契丹版大蔵経などが計十三蔵も伝来している。<sup>(43)</sup> 高麗時代後期に  
は、喜多院や園城寺の例でもわかるように、高麗の貴族が元の  
普寧寺版大蔵経を注文印刷していることから、継続して中国版  
の大蔵経が高麗に入ってきていたと考えられる。日本でも宋の  
勅版大蔵経や福州の開元寺版大蔵経、東禅寺版大蔵経など、思  
溪版大蔵経以外の大蔵経が伝来していることから、高麗でも同  
様のことが考えられるのではないか。

混合蔵の場合、朝鮮時代に大蔵経の枯渇により各地から掻き  
集めて一蔵とした事例があることから、日本に伝来した後に一  
蔵とした可能性よりも、朝鮮で一蔵として日本側に下賜したと  
考えるのが有力である。<sup>(44)</sup>

## おわりに

以上、北野社一切経の底本とその伝来について検討した。応  
永十九年に書写された『大般若波羅蜜多経』の版式が一行十四  
字詰で、『大般若波羅蜜多経』巻第五三二・五三三・五三三・五三四  
の四帖の巻末に「己亥歳 高麗国大蔵都監奉／勅雕造」という  
刊記が、『同』巻第五一には「大般若第五十一 第 張 宙」と

いう柱題がそれぞれ書写されていることは、高麗版大蔵経の特徴と合致することから、応永十九年（一四一二）に書写された『大般若波羅蜜多経』の底本は高麗版大蔵経であることが確認できた。また、それ以外の経典については、ほとんどが思溪版大蔵経であるが、前項で列記した十五帖だけは版式が一行十四字詰であることから高麗版大蔵経と判断できる。

北野社一切経は、北野経王堂の覚蔵坊増範という僧が発願して書写されたが、北野社ではそれ以前に万部経会を開催しており、その管理者が増範であることから、足利将軍家との深い関係を窺い知ることができる。足利氏は応永十八年（一四一一）に朝鮮から大蔵経を賜っており、その中の『大般若波羅蜜多経』を底本として、翌年三月から書写を始めたと考えられる。

それ以外の経典については、他の大蔵経の事例を検討した結果、次のように整理する。①園城寺所蔵の大蔵経は、大内盛見の時代に朝鮮から齎された。また、相国寺や喜多院所蔵の大蔵経は、大内領国内にあったものである。これらは普寧寺版大蔵経や思溪版大蔵経の混合蔵である。②朝鮮から大内氏の手によって日本に齎された園城寺の大蔵経には、一部高麗版大蔵経も混ざっている。北野社一切経についても『大般若波羅蜜多経』以外にも十五部の経典は高麗版大蔵経である。③混合蔵の場合、朝鮮で一蔵をなしてから日本側に下賜された事例があった。こ

れは室町時代後期の事例であるが、初期からもあったと考えられる。④高麗にも日本同様に、中国の様々な刊本大蔵経が齎されていたと考えられる。

資料の不足によって推測の域を脱しない点もあるが、以上のことから応永十九年（一四一一）に書写された北野社一切経の底本となった大蔵経は、高麗版と思溪版大蔵経の混合蔵であり、これは応永十八年（一四一一）に朝鮮から下賜されたものだと考えられる。

応永年間から始まる朝鮮との交渉によって、多くの大蔵経が日本に齎された。これらの中には、高麗版大蔵経もあれば、中国版の大蔵経もある。この頃に足利氏をはじめとする諸大名が朝鮮から競って大蔵経を入手するが、その目的については明らかにされていない。朝鮮から伝来した大蔵経が北野社一切経の底本となったことは、それらが日本どのように活用されたかを示す一例であり、大変興味深い。とはいえ、中国版大蔵経の日本伝来については未だ不明な点があり、今後の課題としたい。

註

- (1) 実は、江戸時代初期に妙心寺で建仁寺所蔵の高麗版大藏經が書写されており、これが一切經書写の最後と思われる。妙心寺での一切經書写は、龍華院竺印祖門が、各方面から天海版大藏經や他の大藏經を求めようとしたが、当時善本と名高かった高麗版大藏經を建仁寺より借りて書写したものである。
- (2) 臼井信義「北野社一切經と經王堂―一切經会と万部經会―」『日本仏教』三、一九五八年。
- (3) 島田治「北野社書写一切經―増畔と増範―」大内町文化財保護審議会、一九九四年。
- (4) 萩野憲司「讃岐国水主神社所蔵『外陣大般若經』と『北野社一切經』について」『一切經の歴史的研究』佛教大学総合研究所紀要別冊、二〇〇四年。
- (5) 臼井信義、前掲論文。
- (6) 伊東史朗監修、千本釈迦堂大報恩寺編『千本釈迦堂大報恩寺の美術と歴史』、柳原出版、二〇〇八年。
- (7) 文化庁文化財保護部美術工芸課『北野經王堂一切經目録』、一九八一年。本稿では、北野社一切經の法量などについては言及しない。
- (8) 臼井信義、前掲論文。
- (9) 伊東史朗監修、千本釈迦堂大報恩寺編、前掲書。
- (10) 文化庁文化財保護部美術工芸課、前掲書。
- (11) 刊記はこれら以外にも「〇〇歳分 司大藏都監雕造」・「〇〇歳分司大藏都監開版」・「〇〇歳分司大藏都監／勅雕造」などがある。「〇〇」には版刻年次の干支が入る。増上寺所蔵の高麗版大藏經には、「〇〇歳 高麗国大藏都監奉／勅雕造」という刊記が見えないが、これは朝鮮時代に印刷されたため、「高麗」という文字を避けるために印刷しなかったと言われている。海印寺に保存されている高麗版大藏經の版本を見ると、各經典の巻末には必ずこうした刊記が彫られている。
- (12) 文化庁文化財保護部美術工芸課、前掲書。
- (13) 臼井信義、前掲論文。
- (14) 足利義満時代の初期の万部經会は十月七日から十六日まで、応永二十年（一四一三）以降は五日から十四日まで行われた。將軍願主の十日間が結願しても、翌日から經会が継続しており、他の願主による經会も行われている。他の願主の存在は、山名氏清の靈を弔う追善供養として始められた当初の經会とは、その目的が異なっている。梅澤亜希子「室町時代の北野万部經会」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』八二〇〇二年。
- (15) 梅澤亜希子「室町時代の北野覚藏坊―勸進と造営―」『仏教芸術』二九四、二〇〇七年。
- (16) 拙稿「高麗大藏經の日本伝存例 関研研究」『韓国宗教』二七、圓光大学校宗教問題研究所、二〇〇四年参照。
- (17) 『太宗実録』十一年十月己亥条
- (18) 『太宗実録』十一年十二月丁亥条
- (19) 臼井信義氏前掲論文。
- (20) 小笠原宣秀『講座仏教 中国の仏教』四卷、大藏出版、一九七九年。
- (21) 小川貫式「思溪円覚禅院と思溪版大藏經の問題」、『龍谷学報』三三四、龍谷大学、一九三九年。
- (22) 増上寺史料編纂所編『増上寺三大藏經目録解説』、一九八二年。
- (23) 喜多院『重要文化財喜多院宋版一切經』、一九六九年。
- (24) 村井章介『アジアの中の中世日本』、校倉書房、一九八八年。

- (25) 長谷部幽蹊「岩屋寺藏宋版一切経とその成立史的背景」『愛知学院大学論叢（一般教育研究）』三三—二、一九八五年。
- (26) 山本信吉「宋版一切経」『奈良六大寺大観 十三 唐招提寺 二』岩波書店、一九七二年。
- (27) 堀池春峰「宋版一切経」『奈良六大寺大観 七 興福寺 一』岩波書店、一九六九年。
- (28) 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺』第四輯之一 宋版一切経、二〇一一年。
- (29) 『云藩通志』卷十五 安芸石殿島三「仏観」条「輪藏二所 並に塔岡経堂の下にあり、北にあるは龍宮界藏、南は転法輪藏と云額をかけり、転法輪の額は根自休が書かり、各一切梵経を藏し、並に釈迦、傳大士、普成、普建二童子を置く、藏経、一は宋板、一は朝鮮板なり」とある。天文七年（一五三八）に厳島神社旧藏の大藏経に欠本が多いため、大願寺の尊海という僧を朝鮮に派遣して新たに大藏経を求めたが、得ることができなかった。そこで、長門国普光王寺所藏の高麗版大藏経が厳島神社に寄進された。この頃には、厳島神社に宋版と高麗版の大藏経が存在していたことが確認できる。梶浦晋「本館所藏高麗版大藏経」『書香』十一号、一九九一年。
- (30) 大藏会編、『大藏会展観目録』文華堂、一九八一年。
- (31) 『防長寺社由来』一、開闢 文明三辛卯歲／陶越前守弘房公之妻、法名花谷妙栄大姉、於仁保之郷為弘房公之建一寺、名安養寺（中略）而改前之安養寺号瑠璃光寺、從開闢到今式百七拾年。
- (32) 『大般若波羅蜜多経』卷第一など、十帖ごとに「宣授中儀大夫王府断事匡靖大夫僉議贊成事上護軍 趙璉／化主 行淳／泰定三年正月孟春印成」という印成記が印刷されている。山本信吉
- (33) 「対馬の経典と文書」『仏教芸術』九五、一九七四年。  
「清信戒弟子故全州戸長朴環妻李氏女 仰告十方／諸佛菩薩、向立願言 女以多生悪業 所鐘累受 女身於諸善根 多有留／雖 今者幸遇桑門正西 広借檀施 予成一代藏教 与子桑門臨川正柔 同／堅願幢 捨納銀泥 写成題目 願以善富當來世 我等母子 及与朴氏 於／佛法中 作大檀那 写成銀字／佛佛藏教 助揚法化、救衆生界／佛教海盡、我願乃盡耳  
泰定五年二月日 臨川寺住持大德正柔志」（山本信吉「対馬の経典と文書」『仏教芸術』九五、一九七四年。）
- (34) 『正法念處経』卷五一 卷末印成記  
奉 三宝弟子高麗国星山郡夫人車氏／特為  
皇帝萬萬歲  
藩主為首三殿各保千秋 亡耦趙文簡靈儀／超生淨界 兼及已身 與祖母国大夫人李氏  
見增福寿 後世永捨 女身同生 安養風調雨／順國泰民安  
先亡父母法界含／靈俱霑利樂之願 捨納家財印成  
大藏経一部 流布無窮者  
延祐元年甲寅十月 日誌  
幹善大德 靖恭  
殿前 仁成  
殿前 天友  
通事康 仁伯
- (35) 万日寺は、全羅北道井邑市所声面万寿里にあった寺院である。高麗時代に建立され十八世紀ごろに廃寺になったと推測される。
- (36) 『慧上菩薩問大善権経』卷上 卷末印成記  
奉三宝弟子高麗国通直郎典校寺承李孟升

同妻卷威郡夫人氏

謹發誠心 捨財印成／大藏尊經一藏 敬安千郷邑古阜郡萬日  
寺／看誦流通 普利無窮 所集洪因端 為祝延  
皇帝萬萬歲 皇后齋年／太子千秋／國王千年 文虎協朝野寧  
／仏日増輝 法輪常轉 四恩普報／三有齋資／次冀追薦先考通  
直郎李祚 外考奉常大夫／尹傾 先妣光山郡夫人金氏 洞州郡  
夫人金氏各離／若趣俱成妙果 皆得樂方 兼及己身 合門春屬  
／助善檀那 同増福智之願 法界有情 同霑利樂者  
至正 年 月 日 幹善比丘 法琪

同願比丘玄珠 祖行 承湛 覺胡

同願善人奉掖大夫王承慶

奉常大夫許 縉

檢校軍器監孫烈

同願本寺住持比丘 禪彦

同願大禪師 乃云

(37) 拙稿、前掲論文。

(38) 『成宗実録』 十八年七月丙子条。

(39) 『成宗実録』 二十年九月壬午条。

(40) 註二九参照。大内氏も大願寺の尊海を朝鮮に派遣して大藏經を求めたが、得ることができなかった。

(41) 『文宗実録』 文宗即位年十二月癸未条。

(42) 得益寺は、高麗時代から伏牛山にあった寺院である。高麗時代の歴史実録が一時期この寺院に保管された由緒ある寺院である。『新增東国輿地図勝覧』二九卷、仏宇条参照。

(43) 高麗の太祖十一年(九二八)に黙和尚という人物が大藏經を船に載せて帰国している。それ以降成宗八年(九八九)、成宗十年(九九一)、顯宗十年(一〇一九)、顯宗十三年(一〇二二)、

文宗十七年(一〇六三)、文宗二十七年(一〇七二)、文宗三十七年(一〇八三)、肅宗四年(一〇九九)、睿宗二年(一一〇七)、睿宗四年(一一〇九)に大藏經が高麗に齋されている。この中には勅版大藏經が完成する(九八三年)以前のものもあることから、写本の大藏經と考えられ、文宗以後は契丹版大藏經が齋されている。

(44) 朴相国氏は、一三九四年から一五五六年の間に日本に齋された大藏經には再雕大藏經以外にも初雕大藏經、宋版、元版大藏經も含まれていると述べている。元版大藏經には印成發願文が付いているため、その伝来の経緯がわかるが、宋版大藏經には印成發願文が付いていない。それは時代的な状況が元版大藏經とは異なっていたからだと述べている。同氏も宋版大藏經(喜多院の思溪版大藏經など)は、朝鮮經由で日本に伝来していると考えている(朴相国「大谷大学の「高麗版大藏經」」『海外典籍文化財調査目録 日本 大谷大学所蔵「高麗大藏經」国立文化財研究所、二〇〇八年)。

(ババ ヒサユキ 嘱託研究員)

